

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会 編集人 同窓会会報編集委員会 委員長 大曾根宏亮 印刷 常陽新聞新社



竣工当時の色で蘇った旧本館

写真提供＝大久保写真館

記念事業日程

県下連合野球大会100年記念親善試合
日時 平成16年11月6日(土) 9時～
【雨天の場合11月7日(日)】
会場 土浦市営球場
【雨天の場合土浦市運動公園広場
(土浦市佐野子)】
旧土浦中学校本館竣工100年記念式典
日時 平成16年11月13日(土) 10時～
会場 土浦一高進修記念館(同窓会館)
記念講演
日時 平成16年11月13日(土) 10時30分～
会場 土浦一高進修記念館
旧本館特別公開
平成16年11月13・14日 10時～
校旗制定100年記念校歌祭
日時 平成16年11月14日(土) 13時～
会場 土浦一高体育館
(詳細については8面実施要項参照)

建第一九七八号

重要文化財指定書

旧茨城県立土浦中学校本館 一棟

木造、建築面積九八七平方メートル、一階建、スレート葺

附 棟札一枚
上棟式明治三十七年十月五日の記がある

右は重要文化財に指定する

昭和五十一年二月三日

文部大臣 永井道雄

重要文化財指定書 資料提供＝大久保写真館

旧土浦中学校本館築百年記念

同窓会会長 幡谷 祐一



創学百周年という記念すべき時に会長を務めることができ、重ねて本館竣工百年においても同じく会長として参画できることは、誠にうれしく、人生の誇りと思っています。

歴史が証明するように、多くの先輩達の功績、戦後の若い人達の学問に対する熱心さ、努力の結晶が、今日の類まれな栄光へと導いたものと思います。土浦中学校出身として胸を張ることができま

す。人間一生勉強です。幕末の儒学者、佐藤一斎の言葉に「少にして学べば老いて衰えず、老いて学べば死して朽ちず」とあります。ぼんやり生きても、学問や趣味に打ち込んで一生は一生です。

「光陰矢のごとし」と訓にもあるように人生は短く、また「時間を貴べ」というユダヤ人の戒めもあります。「歳月不待人」や「人生は白駒の隙を過ぎる如し」「昨

日の少年今白頭」という言葉もあります。このように時間や月日を大切にすることは溢れるほどあります。月日が経つのは真に早いものです。

母校の生徒諸君もまだまだ先が永いと思っていると、人生に負けることになると思います。お金は貯めることができても、時間を貯めることはできません。しかし、知識は蓄えることができ、それを強く認識する必要があると思っています。

母校のこの百年の歩みを見て、いつの間にか過ぎていたのかという思いが頻ります。私にしても昭和十六年の卒業です。六十年余りが過ぎておりますが、この間には多くのことがありました。軍隊生活の二年間、復員後の大学復学、農民組合との闘争、そして中学校に無事入学できた喜びでさえも、総てが昨日のこのように思われます。

現在も時代の変化は早く、電話はますます発達して遠方の友人といつても話ができて、移動手段も陸海空ともに便利になるなど世界はどんどん狭くなっています。一方、人間の闘争欲は相変わらずであり、世界各地で紛争が絶えない状況です。

このような中、これから長い人生を送る生徒諸君には、明るいこ

と、暗いこと、楽しいこと、悲しいこと、あるいは得意のとき、失意のときなどが代わる代わるやってくる筈です。その逆境の時に、それをねかえす精力を蓄えるのが今であり、総てに真面目に取り組むことが求められているので

です。母校の学舎がこの百年を生きてこられたのもしっかりと設計と、工事に当たった技術者一人一人の力の結果であります。また、本校がいつの間にか日本を代表する学校になったのも同様のことだと思います。私達もしっかりとした勉強に基づき、総て根拠のある言動をしていくことが人生の安全航路につながることを確信をもって言えます。明るく生きるか、暗く過ごすかは自分が決めることです。百年の風雪に耐えた本校舎のように、今から人生を設計し、人生の技術を身につけるよう努力して下さい。

高校時代は人生で最も華やかな時代だと思います。生活の心配は親がしてくれまので、ただひたすら己のことに邁進し、その過程で生まれる楽しみも苦しみも総て自分自身のこととして対応していくことです。

若い時に基礎をしっかりと固めれば、明るい未来への展望が開かれることになります。樹木のように幹を太らせ(知識)、花を咲かせ(自信)、身につける(成果)ことができます。百年の学舎に負けることのないよう人生に花を咲かせましょう。

ご協力に感謝

旧土浦中学校本校竣工百年記念事業推進委員会委員長

大曽根 宏亮



一昨年、同窓会の中に日本館活用委員会が発足し、旧土浦中及び土浦一高に関する資料の収集、集まった資料の展示、更に日本館を月1回(四月は同窓会当日、五月はPTA当日、六月は一高祭期間、七月以降は第二土曜日)市民に公開する事業が進められることになり、以後二年半の間に三千余人の市民の参観をいただきました。

旧土浦中学校本館は、日露戦争の真最中の明治三十七(一九〇四)年に、土地・建物を併せて、当時の県予算の6%に近い巨費を投じて建設された明治後期の洋風学校建築を代表する建物であり、昭和五十一年に国重要文化財に指定されております。一般公開を進めていく中で、今年が竣工百年に当る事から、校旗制定百年、現高校野球の母体となった県下中学連合野球大会百年の行事と併せて記念事業を行い、広く県民の方々に郷土の文化財を観ていただくよう言う気運が盛り上がりつつあります。

た。

本年一月の同窓会本部役員会、三月の評議委員会、四月の同窓会総会におきまして記念事業の実施が決定され、旧土浦中学校本館竣工百年記念事業推進委員会が組織されました。行事の内容は、建物の百年関係では、記念講演、特別展示、旧正門門扉修復、記念はがきの印刷であり、野球関係では水戸一高(土浦分校時代の本校)、下妻一高(土中の兄弟校)、竜ヶ崎一高(土中の分校)の三校野球部の協力をいただいての親善野球試合、校旗関係では、全日制及び定時制用の新応援旗の作成と、その披露を兼ねた校歌祭で、前記三校の応援団とプラスバンド部の協力をいただこうというものであります。

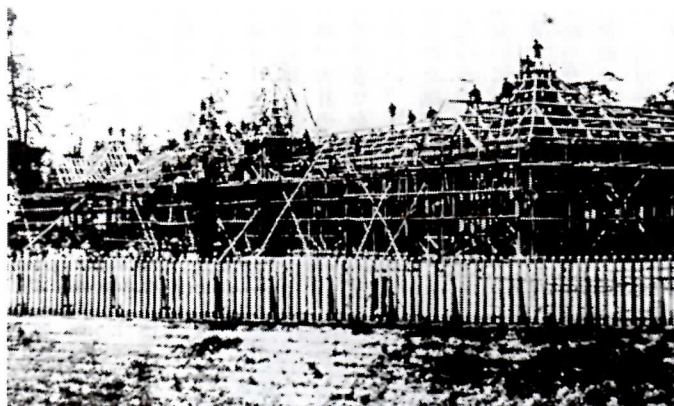
水戸一高、下妻一高、龍ヶ崎一高の関係者の方々、本校野球部OB会、応援指導部OB会、同窓会本部役員の皆様、野球の資料をご提供いただいた中48回の色川様、更に写真提供をいただきました高6回の奥村様ほか多くの皆様、記念講演をお願いした高11回の一色様などたくさんの方々のご好意とご協力により記念行事が行われる事になりました。関係の皆様のご尽力とご協力に感謝申し上げます。挨拶に代えさせていただきます。

校長 山田隆士



と言われる改革が進行
する中で、本校の果た
す役割は益々重要性を
帯びてきていると痛感

先輩の皆様から受け継いできた「旧本館」は、その象徴であると共に、自主・独立の気風を培い、高い理想と自己実現に努める「若人の学舎」として、次の世代にも燦然と輝き続けるものと確信しております。



写真提供 大久保写真館

年号	西暦	月日	事項
明治30	一八九七	4月7日	茨城県尋常中学校土浦分校設置 本校創立 新治郡役所楼上において授業開始(創立記念日)
明治32	一八九九	4月22日	立田新校舎(現土浦二高)に移転
明治33	一九〇〇	12月21日	茨城県土浦中学校として改称・独立
明治37	一九〇四	4月1日	校旗捧呈式举行
		7月4日	真鍋台新築校舎上棟式举行(設計は駒杵勤治技士)
		7月28日	県下連合野球大会開催(神立原の運動場にて)
明治38	一九〇五	12月7日	真鍋台新築校舎竣工
明治42	一九〇九	3月5日	真鍋台新築校舎に移転(旧校舎は土浦高等女学校に)
明治44	一九一一	10月30日	校訓制定式举行(「至誠・自重・愛敬・剛勇・勤儉」)
昭和12	一九三七	1月1日	校歌制定(作詞 堀越晋 作曲 尾崎橋馬)
昭和21	一九四六	10月24日	土浦中学校同窓会発会式举行
昭和22	一九四七	11月3日	新校訓「自主・協同・責任」制定
昭和23	一九四八	4月1日	土浦中学併設中学校発足
昭和25	一九五〇	4月1日	土浦中学創立五十周年記念式典
昭和29	一九五四	4月6日	茨城県立土浦第一高等学校発足
昭和32	一九五七	4月1日	本校初めての女子生徒入学(六名)
昭和38	一九六三	10月30日	土浦一高応援歌誕生
昭和43	一九六八	4月12日	この年「高体操」生まれる
昭和44	一九六九	8月1日	野球部甲子園出場
昭和49	一九七四	2月27日	進修同窓会会報創刊号発刊
昭和51	一九七六	4月1日	体育館竣工
昭和53	一九七八	2月3日	全日制理科設置
昭和55	一九八〇	12月3日	茨城国体集団演技出演(開会式と閉会式)
昭和61	一九八六	10月	茨城国体集団演技出演(開会式と閉会式)
昭和62	一九八七	9月3日	旧土浦中学校本館校舎 国の重要文化財に指定
平成8	一九九六	6月9日	一高祭 九月より繰上げ実施となる
平成9	一九九七	9月11日	第一回一高オリンピック実施
平成10	一九九八	10月	本館校舎竣工
平成13	二〇〇一	3月30日	旧土浦中学校本館保存修理工事
平成15	二〇〇三	3月15日	旧土浦中学校本館周辺造園工事
平成16	二〇〇四	7月15日	「創立九十周年記念土浦一高史 発行
		10月23日	多目的学習館(進修学習館)竣工
		11月1日	同窓会館(進修記念館)竣工
		11月1日	創立百周年記念式典举行
		11月1日	「進修百年 土浦中学・土浦一高百年の歩み」発行
		11月8日	創立百周年記念モノメント「天極」建立
		11月8日	定時制創立五十周年記念式典举行
		4月1日	定時制「星座」創立五十周年記念号「発行
		3月16日	全日制理科募集停止
		3月26日	新体育館竣工
		11月	旧土浦中学校本館外壁塗装工事
			旧土浦中学校本館竣工百年記念事業開催

学校の沿革

旧茨城県立土浦中学校本館

本校の歴史と伝統の象徴とも言えるべき国重文校舎が竣工百年を迎えた。この旧制中学以来の校舎で実際に学んだ昭和五十年代半ばまでの卒業生には殊更懐かしく、その後の皆さんもこの校舎の風格あるたたずまいは一高生活の記憶のどこかに刻まれているのではなからうか。校友の皆さんが母校に心を通わせる一助にもなればと、重文校舎についていくばくかの見聞きしてきたことを記してみたい。

真鍋台の新校舎

本校は明治三十年創立後しばらくは土浦の各地に転々としたが、明治三十七年十二月に現在地に新校舎が竣工し、翌三十八年からこの真鍋台に腰を据えた。

当時の中学校校舎は実用一点張りのバラック(兵舎)の意)式と呼ばれる建物のごく当たり前だったから、装飾性豊かなゴシック式洋風建築というこの真鍋台の新校舎はひととき異彩を放っていた。

その頃新校舎を訪れたとしたらその人の目にはどう映っただろうか、思いをめぐらせてみよう。

《校門から土手沿いの緩いスロープを上ると、左手に校舎の正面全景が立ち上る。二階建と見まがう高さ。下見の桜色のペイントがまぶしい。中央に三角形の切妻破風の玄関、その両脇に天を指す尖

塔、尖塔の左右に伸びる屋根面には計六基の千鳥破風、校舎両端にも切妻破風、すべてが玄関を軸に緊密なシンメトリーを構成し、校舎全容の格調を正している。

玄関に進み端麗な三連アーチをくぐる。見慣れない意匠に飾られたアーチ柱頭や玄関の高い天井の華やかなレリーフも西洋の香りを漂わせる。何もかも目新しい。《新校舎に一步を踏み入れた感想を写すところどころだろうか。

たいていは鮮やかな装いに目を奪われがちだが、設計者は機能面の配慮も忘れてはいなかった。一例を挙げよう。校舎の側面の大方を占める縦に長い窓は、付け柱とともに外に向けては直線美を演出するが、室内には採光を高めるよう働く。これは当時用意されるべき環境だった。電灯はまだない。土浦にそれもごく一部の家に電灯がとれるのが、ようやく明治四十三年末である。

国重文指定と復元工事

往時の新校舎が時を経て昭和五十一年二月に国の重要文化財に指定された。屋根が天然スレートから現状に葺き替えられはしたが、明治後期洋風木造校舎を完全に近い姿で残している点が評価された。現在「旧本館」と呼ばれるのは表紙に掲げた重文指定書上の呼

称に基づく略称である。

現在学校建築の国指定重文は五十六件。うち旧制中学校はわずかに五校。本校旧本館の指定は、同時に指定を受けた旧茨城県立太田中学校(現太田一高)講堂とともに

に、旧制中学校建築最初の国重文指定という名譽あるものである。

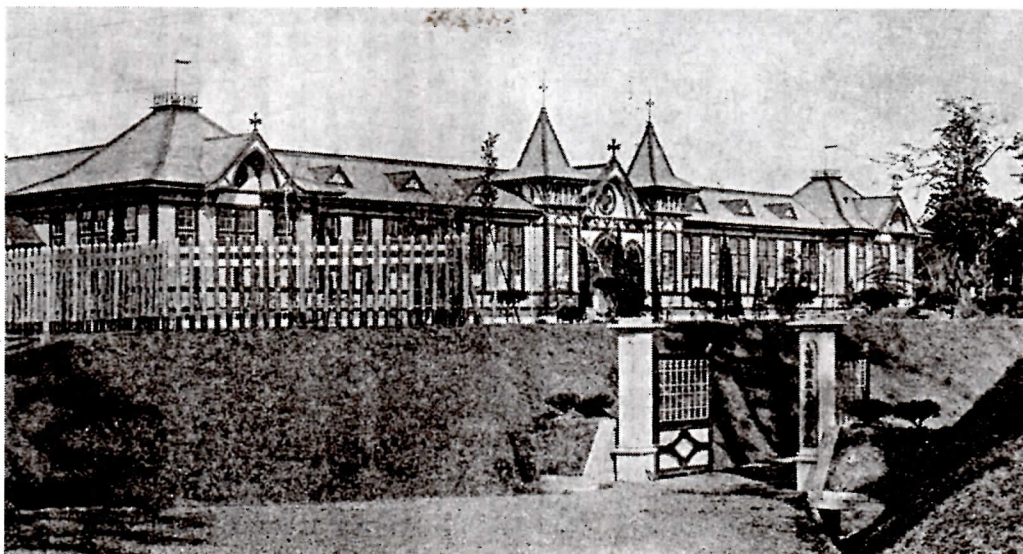
指定に先立つ昭和四十九年、旧本館保存に向けて一部改修・復元工事が行われたが、その監理を県から任された一色史彦氏(当時県文化財保護専門委員)によ

り、棟札が玄関屋根裏から発見され、設計者が初めて明らかにした。

明治三十七年七月の上棟式に捧げられたであろう身丈にも余る堂々たる大棟札と、「上棟式大棟梁茨城県技師工學士駒杵勤治」と

いう気迫あふれるその墨跡を見るとき、本校建築にか

けた少壮の建築家駒杵の意気込みのほどが余すところなく伝わってくる。この棟札もまた国重文に指定されている。



竣工当時の旧土浦中学校

ちなみに前記の旧太田中講堂も駒杵の設計によるものである。

創立九十周年記念事業の中で昭和六十一年にも保存補修が行われた。戦後の一時期まで使われた椅子と一体型の机が復元され、それを並べた教室も一教室復活した。

旧本館は一昨年からほぼ月一回一般公開されているが、この教室に入つた来館者の大半が古風で頑丈な椅子に腰を落ち着け、昔の生徒の気分になる。

本校創立以来の歴史を語る様々な資料の展示室も設けられ、現在に至っている。

旧本館関連記念事業

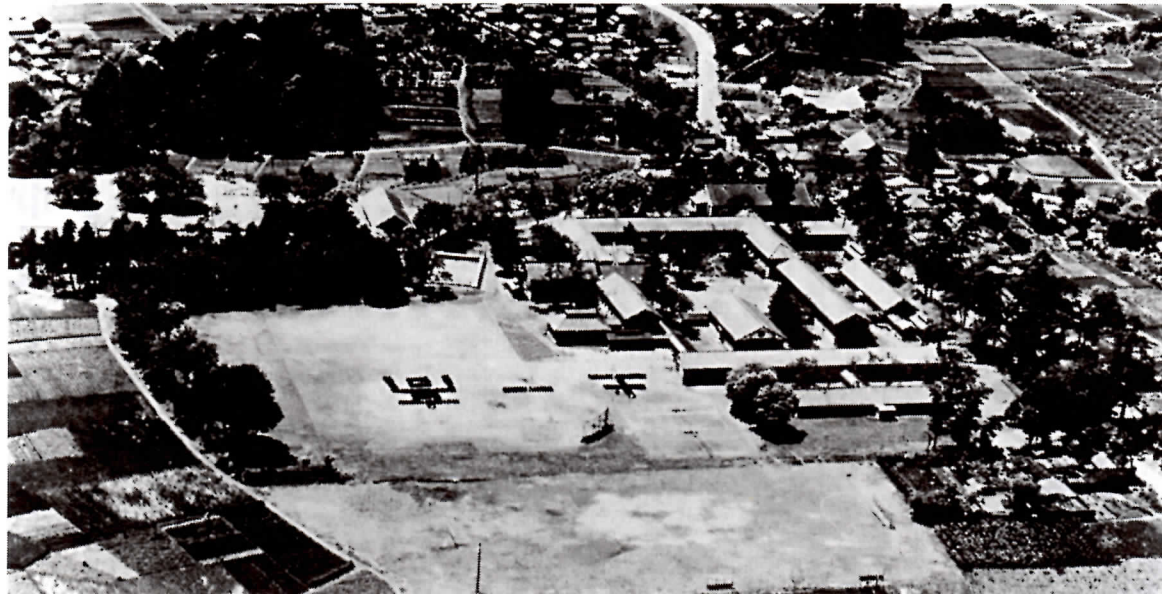
旧本館関連の主な記念行事・事業は次のとおり。(1)・(2)の日程等は8面参照。

(1) 記念講演 講師は、既述のように旧本館とも関係が深く本校OBでもある建築文化史家の一色史彦氏(高11回卒) 演題は「旧土浦中学校本館と駒杵勤治」

(2) 旧本館の特別公開 今回は本校所蔵未公開書画類の展示等を含めた特別展も行う。

(3) 旧正門の門扉の修復 昭和五十一年に中学46・47回生から卒業30周年記念として、旧本館に通ずる旧正門の門扉が寄贈された。しかし痛みが進み、今夏復元され五十一年当時の姿を取り戻した。

(4) 記念ポストカードの作成



松並木の残る昭和30年当時の航空写真



復元教室



玄関の三連アーチ



修復された旧正門門扉



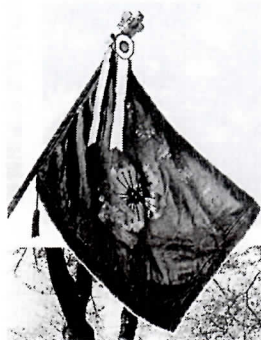
重文の棟札

校旗制定も百年前

旧制土浦中学校の校旗は、今から百年前の明治三十七年一月に制定された。このことについて、『進修』第六号(明治三十八年刊)に、『明治三十六年の仲秋時の四年級生徒は発起となりて秋季大運動会を挙行せしが、…経費に多額の残余を生ぜしかば、これを空しく消費せんも可惜しとて一同にて更に釀金して、而も五十円で大金を得しかば、記念として校旗を寄附せんとの議、茲になれり。…歳暮に至りて漸く落成せり。依て一と先、校長の邸宅に納め置きしが、越えて三十七年一月一日、この日こそ校旗を捧呈すべき吉日なれとて、四年級生一同は禮拜式後武装に身をかためて真鍋なる校長の宅へ赴き、恭く受取りて隊伍堂々土浦町を迂回し本校に向う。…やがて本校に達するや直ちに校旗捧呈式をば挙行したり。』と生徒たちが運動会経費の残金に寄付金を加えて校旗を作製し、学校へ寄贈した経緯が記されている。なお、文中の本校とあるのは現在地に移転する以前の立田校舍(現土浦二高)である。紫紺地に錦糸で校章を施した校旗は、誰によるデザインなのか、製作を請負った業者はどこなのかなど、上述以外全く記録が無いので、詳細についてはわからない。

新校旗披露「校歌祭」

この百年前に作られた校旗は、



旧制土浦中学校の校旗
写真提供：大久保写真館

今はその役割を終え、かなり色褪せてはいるものの、土中時代の輝かしい歴史を帯びて、旧本館資料展示室に納められている。進修同窓会は、この校旗制定百年を記念して、新たに二本の校旗を作成し、全日制と定時制にそれぞれ贈呈した。全日制用は主に野球応援など式典以外に使用するもので、たたみ六畳分ほどもある大きなものである。その披露の名目で、親善野球大会と同じ参加校による「校歌祭」を行うことになった。校旗と校歌は共に学校を象徴するものとして、深く結びついている。因みに本校校歌の制定は明治四十四年である。参加校四校はいずれも創立百年以上の伝統校。校歌にはそれぞれの学校の歴史と校風が息づいている。土水戦(水戸一高と土浦一高の定期戦)が取り止めになって久しく、他校との交流が乏しいこの時期であるだけに、各校の伝統と校風を鼓吹する場としての「校歌祭」の催しは大きな意義があるものと思われる。

水戸第一高等学校 校歌

古賀快象 作詞
片岡亀雄 作曲

- 一、旭輝く日の本の
光栄ある今日のそのもとは
義人烈士の功績ぞ
忠孝仁義の大道を
貫く至誠あるならば
天地も為に動きなん
- 二、世界にきおう列強と
ならびて進む帝国の
基礎は堅忍力行ぞ
花朝月夕つかのまも
古人に恥じぬ心して
ゆめ怠るな一千人

下妻第一高等学校 校歌

監修 横瀬 夜雨
作詞 外池達之助(10回卒)
菊地 暁男(10回卒)

- 一、東に聳ゆる筑波根を 心の友と仰ぎつつ
関八州の唯中に 花散り月は移ろえど
為桜の園は牢として 千百健児の意気高し
- 三、人あり我らが胸問はば かくと答へん桜花
動かぬ雲と靡く時 御代の姿と登り行く
朝日の影に色添えて 春永へに誇あり
- 五、昔男子は眉揚げて 天下に敵すと誇りけり
山の黙姿は今もなお その世ながらに語らずや
立てや筑麓健男児 漲る雄図示すべし

竜ヶ崎第一高等学校 校歌

作詞 寺田彰司
曲 旧制一高寮歌
「アムール川」のものを
借用(栗林 宇一作曲)

- 一、千秋の雪積もりたる 富士の高嶺の雄姿ぞ
幾万代の後までも 変わらぬ誠の鑑なる
- 二、奔流百里石をかみ 巖に激しいや増しに
勢加わる利根の水 これ剛健のためしなり
- 三、あゝ此の山と此の川と 日夕眺むる健男児
自然の示す巨人をば 如何に学ばん習わなん
- 四、白幡台の雪月花 四季の折々常緑の
平野にしるく輝くは 高潔無垢の別天地
- 五、石段登る六十余 一足ことに踏みかため
心を鍛え身を練りて 忠良有為の基たてん

土浦第一高等学校 校歌

堀越 晋 作詞
尾崎楠馬 作曲

- 一、沃野一望数百里 関八州の重鎮とて
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水
- 二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影
- 三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の氣を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり
- 四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

県高校野球の原点 「県下連合野球大会」

土中の提唱で始まる

最初の参加校は3校

明治三十七年、土浦中の呼びかけで第1回の県下中学野球大会が開催された。今からちょうど百年前のことである。水中黄金期に主将として活躍し、後に「学生野球の父」と呼ばれた飛田穂洲は「六月下旬土浦中学より県下大会を開催し大いに県内の士気を鼓舞しようという勧誘状が舞い込んだ。無論水戸中学は無条件で賛意を表し、期日は八月一日、土浦在神立原を会場に定め、土浦中学は主催校として万事に幹旋することになった。これが茨城県下大会の嚆矢である。土浦は水戸をはじめ下妻、竜ヶ崎、太田、水海道に勧誘状を発したが、この時参加したのは僅かに土浦、水戸、竜ヶ崎の三校に過ぎなかった」と彼の著書『野球人国記』誠文堂昭和6年刊に記している。水戸中が野球を始めたのは明治二十一年ごろとされており、二十四年に野球部が創設されている。十年ほど遅れて、明治三十二、三十三年ごろから土浦、太田、下妻、竜ヶ崎などの中学に野球熱が高まるが、先輩

格の水戸中が圧倒的な強さを誇っていた。このような情勢の中、土浦中がどのような経緯で県大会を提唱したのかは定かでない。

対外試合の気運高まる

明治三十年、茨城県尋常中学校(水戸中)の分校として産声をあげた土浦中では、未だ校庭もない分校時代から野球が盛んで、ふだんは土浦小学校の校庭を借りて練習し、日曜日には脚絆に地下足袋姿で、鉄道線路を辿って神立原まで出向き、練習試合などをしていった。

明治三十二年に、土浦と同時に分校として創立された下妻中と初の対外試合を行っており(雨のため3回で中止)、その後も度々対校試合を行っていた。(『下妻第一高等学校野球部史』中巻時代編、平成15年刊)。35年には、土浦中の分校として創設された竜ヶ崎中と利根川河畔で練習試合をしている(竜ヶ崎中学『校友会誌』第一号)。更に翌三十六年に、強豪水戸中に挑戦するなど、対外試合に積極的になっていった。その翌年の明治三十七年一月に校旗が制定

され、同年七月には真鍋台にモダンな新校舎の上棟式が行われている。こうした土浦中草創期の発展し続ける勢いが校内に張り、その発露の一つが全県下に檄を飛ばす形になったものと思われる。

称えられた土中の役割

県下連合野球大会は各校持ち回りで開催され、明治三十九年の第三回大会より参加校は五校となり、優勝校には大会を後援した「いはらき新聞社」(現茨城新聞社)から銀牌が贈られた。第一回大会以来無敗という水戸中の強さばかりが際立ったこの大会は各校応援団同士の対抗意識があまりに

も過熱し、弊害を生むなどの理由で以後取止めとなったが、

「明治四十二年は茨城県の野球の水河期が始まった年であり、連合大会という目標を失った野球部は、練習試合をするよりなかった」(『下妻第一高等学校野球部史』中巻時代編)とこの大会の中止を惜しんでいる。ともあれ、近年の茨城県高校野球のレベルが全国的にも高い水準にあることを思うとき、全国に先駆けて県大会を始めた意義は大きい。飛田穂洲は『いはらき新聞』(明治40・7・30)に「第一回県下の大会は四年前、三十七年七月二十八日土浦中学優勝時代、該校が発起して神立原に

開催したのが始めてで、今日の如き立派なものになったのであるから大会に就ては土浦中学が最大の恩人とも云うべきであろう」と土浦中の功績を称えている。

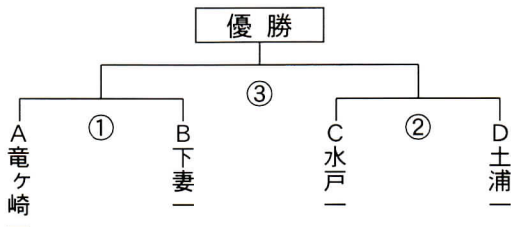
県高校野球の原点ともなった県下野球大会が開かれて百年目に当たる今年、これを記念して親善試合を催すことになった。この親善試合は、重要文化財に指定されている旧土浦中学校本館竣工百年記念事業の一つとして土浦一高が企画したもので、土浦一高と歴史的に関係が深い水戸一高、下妻一高、竜ヶ崎一高の三校に参加を呼びかけ、四校で行われる。



五中学選手集合写真(『下妻一高野球部史』より)

親善野球日程及び組み合わせ

- 開会式 8:00～
・主催者挨拶 ・学校長挨拶 ・来賓挨拶
・記念品贈呈 ・選手代表挨拶 ・選手退場
- 組み合わせ(トーナメント)



試合開始予定

① 9:00～ ② 11:20～ ③ 13:30～

- 閉会式 ・主催者挨拶
- その他
※試合決定は6:30(大会本部より電話にて連絡)
※高校野球特別規定(高校野球要覧通り)
※開始後は土浦市営球場を本部とする
土浦市営球場 土浦市川口2-12-75
TEL029-824-5637
※雨天順延の場合は
土浦市運動公園広場(土浦市佐野子)で行う

学び舎建築

駒杵勤治



日本における本格的洋風建築の草創期に、茨城県内の建築を語る場合、筆頭にあげられる建築家が、駒杵勤治である。

彼は、学会で『當今我邦における建築には、形態の不備と構造の脆弱なるものが甚だ多い。鎖国の時代ならいざ知らず、苟くも列國と肩を並べて、文化を競ふ明治の聖代に於て、物質的進歩を代表するところの建築が、粗雑拙劣を極めると有つては、他國人に對しても耻かしい譯だ、・・・』と論述するなど、当時の建築事情を嘆き、また彼自身は、高度な学識に裏付けられた正統的建築を目指して、建築史的に見ても貴重なものが多いと言われている。

彼は、明治十年に山形県最上郡(現、新庄市)に生まれ、工部大学校(現東京大学工学部建築学科)では辰野金吾氏(後、東京大学学長)に師事し、半年の繰り上げ卒業を果たした明治三十五年には、茨城

県知事河野忠三の要請で官吏として赴任することとなった。在任わずか二年三ヶ月の間に、我が旧制土浦中学校本館をはじめとして、

旧制太田中学校講堂(現太田一高)、旧茨城県立商業学校本館(現水戸商業高)―以上、現存及び一部現存―、旧制竜ヶ崎中学校講堂(竜ヶ崎一高)、旧麻生警察署、旧下館警察署、旧茨城県立図書館、旧制水海道中学校講堂(現水海道一高)の設計と施工管理に八面六臂の活躍をみせた。その後は、伊勢神宮造営工事と佐世保鎮守府庁舎建築に関わり、福岡で建築事務所を開設した。大正八年に僅か四十二年の人生を閉じた事を考えると、茨城に残されている三つの学校は、彼が最も輝いていた時代の残照ともいえよう。

旧制土浦中学校本館は、彼自身が学んだ工部大学校(恩師、辰野金吾の設計)をお手本にしたと思われ、中学校と言えばバロック様式が多かった当時の中で、ゴシック様式を採用し、あの特徴的な、長く伸びた両端に幾分突出した教室、正面の三連アーチ、屋根には千鳥破風、また両端の切妻破風の上にはアカンサスの花”など、その斬新さは世評を賑わせるものであった。

「旧土浦中学校本館竣工百年記念事業」実施要項

一 趣旨

本校の前身である旧制土浦中学校が明治三〇(一八九七)年に開校されて以来、今年度は創立一〇七年目を迎えるが、旧本館竣工及び校旗制定、更には県下に呼びかけて連合野球大会が開催されて、それぞれ百年という三つの慶事を迎えた。この記念すべき年に、本校の歴史と伝統を継承し、母校の更なる発展を期して土浦一高進修同窓会が中心となり、記念事業を開催する。

二 主催

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
茨城県立土浦第一高等学校

三 記念事業

(一) 旧土浦中学校本館竣工百年記念事業
明治三七(一九〇四)年七月四日、旧土浦中学校校舎は現在地の真鍋台に上棟式を迎え、一二月七日に竣工して以来百年目を迎える。

ア 旧土浦中学校本館竣工百年記念式典

日時 平成一六年一月一日(土) 一〇:〇〇～一二:〇〇
会場 土浦一高進修記念館(同窓会館) アリーナ
内容 記念式典(一〇:〇〇～一一:〇〇)
記念講演(一一:〇〇～一二:〇〇)
「旧土浦中学校本館と駒杵勤治」 講師 建築文化史家 一色 史彦 氏

イ 旧本館特別公開(一〇:〇〇～一六:〇〇)
(東京大学工学部建築学科卒; 本校高十一回卒)
期日 平成一六年一月一日(土) 一四日(日) 二日間
内容 一般公開・特別展示(本校所蔵の書画類等)

(二) 校旗制定百年記念事業

明治三七(一九〇四)年一月に制定された。生徒たちの手によって制作され、学校へ寄贈された。

イ ア 応援旗の制作(全日制・定時制)
校旗制定百年記念校歌祭

日時 平成一六年一月一日(日) 一三:〇〇～一六:三〇
会場 土浦一高体育館
内容 土浦一高・下妻一高・竜ヶ崎一高の三校を招待して、各校の応援指導部(委員会)を中心に吹奏楽部等が参加して、校歌やエールの交換を行う。

(三) 県下中学連合野球大会百年記念事業

明治三七(一九〇四)年七月、本校が提案して、県下連合野球大会が神立原で開催され、水戸・竜ヶ崎の三中学校が参加して実施された。

ア 県下中学連合野球大会百年記念親善試合

日時 平成一六年一月六日(土) 八:〇〇～一六:〇〇
会場 土浦市営野球場(土浦市川口町二一七五)
内容 土浦一高・下妻一高・竜ヶ崎一高の三校を招待して、各校の硬式野球部による親善試合を行う。

- ① 開会式(主催者挨拶、学校長挨拶、来賓挨拶、記念品贈呈、選手代表挨拶)
- ② 試合(①九:〇〇、②一一:二〇、③一三:三〇)
- ③ 閉会式(主催者挨拶)